

暮らしを支える共動支援を目指して

— WANTS の視点 NEEDS の視点 —

植 松 克 友

(附属養護学校)

1 テーマについて

・これまでの研究を引き継いで

本校は過去6年間において「確かな社会参加につなげるためには」というテーマのもと、研究を重ねてきた。そこでは、児童・生徒そして卒業生の生活を「仕事」、「生活」、「余暇」の観点から分析し、社会参加に向けて有効と思われる能力や支援のあり方を模索してきた。そして、「共動」という理念の下、共動支援計画、共動移行支援計画を軸とした支援システムをスタートさせるに到った。

・社会の変化

保護者や関係機関と情報を交換し、それぞれの立場で児童生徒にアプローチしてきた従来の連携体制から、目標の立案、指導・支援方法の検討、実践、評価の各段階で共に動く「共動」への進展については、平成15年度から開始された支援費制度に見られる福祉の世界での質的な転換と関連づけて考える必要がある。児童、生徒たちを取り巻く社会が変化し始めようとしている。事実、県内においてもグループホームの数は増加傾向にあり、就労支援、生活支援ワーカー やコーディネーターが設置されるようになった。施設や作業所にも「地域へ」という意識が広がりだし、知的障害者のための支援費指定事業所もこの1年で整備が進んだ。共動支援のパートナーとなりうる社会的な資源が過去に比べて確実に増えてきているといえる。

・WANTS の視点

知的なハンディキャップのある人にとって自己選択・自己決定することは容易ではない。コミュニケーションの問題にくわえ、内発的な動機づけの少なさ、選択経験の少なさなどが要因

と考えられる。本校は長年コミュニケーション力の育成に取り組み一定の成果を得た。この成果を踏まえ、欲求や要求、願望、意思をもち、表出する力を如何に育てていくのかが今後求められてきている。WANTS（本人が望んでいる環境や支援など）の視点に立った教育である。小学部段階から内発的動機付けを喚起し（WANTS の芽を育てる）、選択経験を重ねることで、WANTS を表現できるようにしていく。より高次な段階においては、生徒自身のWANTS が自身に寄せられている NEEDS（支援者の立場からみた本人にとって必要だと思われる環境、支援など）を自覚することによって規定され変容し、自身のWANTS と NEEDS が多くの部分において重なり合うような指導方法を探っていきたいと考えている。

・NEEDS の視点

従来から、学校現場では「本人の NEEDS を大切にした教育」ということばが使われてきた。しかし、そのことばの中には周囲の指導者・支援者にとっての NEEDS として使われてきた傾向は否めない。本当に本人が望んでいることなのか、また、願いをもてるような環境を整えてきたのかという反省をしなければならない。一方、教育者としてアセスメントを基にして、児童生徒につけたい力、必要と思われる環境を設定し（教師がとらえた本人の NEEDS），指導していくことは学校教育において基本であると考える。このことなくして学校教育は成立しない。と同時に、WANTS が明確になってくれば、今度はそれによって NEEDS が規定されていくことも十分考えられる。アセスメントの要因として WANTS を捉えることがより重要視されてくるのである。

・すべての教育現場に共通する視点

WANTS と NEEDS の視点は、障害児教育のみならず広く学校教育全般にわたって有益な視点となると考えられる。本校の教育活動が学校教育推進の一端を担えればと思っている。

以上のことから、WANTS と NEEDS の視点を明確にしながら「暮らしを支える共動支援を目指して」という研究テーマを設定した。

2 研究の目的

本研究の第1の目的は、本人の WANTS と保護者の NEEDS、教師のとらえた本人の NEEDS を共動支援計画の中に位置づけ、それを反映した授業を実践すること、および教育課程、教育内容を再編することである。児童生徒の暮らしを支えるという観点から授業およびカリキュラムを見直していく。

第2の目的は、WANTS を育てることにある。小学部段階から内発的動機付けを如何に形成していくか、WANTS の表出機会を確保していくかを探っていく。発達段階に沿って、最終的には自分自身の NEEDS を自覚し、自分で WANTS を変容していくけるような指導を目指したいと考えている。

第3の目的は、暮らしを支えるネットワークの構築である。各学部入学時の支援の引継ぎや在学中の福祉機関、地域資源との共動、そして、

高等部卒業時のネットワーク会議に代表される卒業後のネットワークなど、3年～12年間で現在および卒業後の暮らしを支えるネットワークをつくる態勢を整えていく。あわせて、ボランティアガイドやサポートブックを発展させ、第三者支援の方策を探っていきたい。

3 研究の方法

全体テーマから各学部ごとに下記のとおり学部テーマを設定し、それに基づいた授業研究、事例研究を行う。

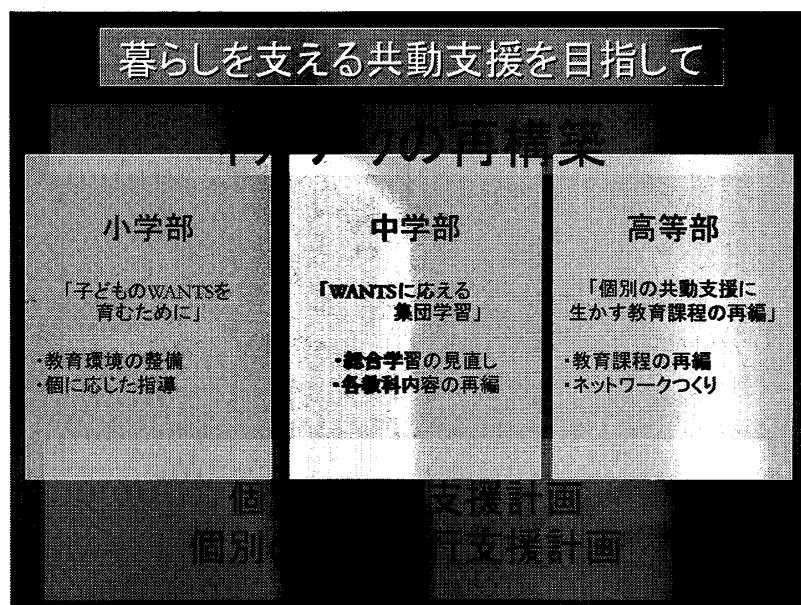
小学部・・・子どもの WANTS を育むために
中学部・・・WANTS に応える集団学習
高等部・・・個別の共動支援に生かす教育課程の再編

また、学部をまたがった研究として研究部主導で12年間のネットワークつくりに取り組む予定である。

4 各学部の取り組み

(1) 小学部 「子どもの WANTS を育むために」

小学部では、子どもたちに分かるように伝えるための方法として構造化のアイデアを工夫したり、表出を促すためにコミュニケーションエイドを用いたりして、双方向のコミュニケーション



ションが成立するように学校生活全般をとおして環境を整える工夫をしてきた。しかし、子どもたちのなかには自ら発信することを苦手としている児童も少なくない。ある決まった流れのなかで指導する場面は作りやすいが、構造化されたなかでは、分かりやすいために課題解決のためのコミュニケーション環境が整いにくいという一面もある。そこで、本研究では、コミュニケーション技能が未熟な小学部の子どもたちに、選択する機会を多く設けるような学習環境を設定し、子どもたちが自ら発信して選ぶという経験ができるようにしていきたいと考えている。選択をとおして発信する経験を積み重ね、WANTS を表現することができるように指導していきたいと考えている。

子どもたちが、いろいろな場面で自己表現できるようにするために、学校以外の環境でもコミュニケーションすることができるような場面をもつ必要がある。しかし、障害のある子どもの場合は、そのための配慮が必要である。学校で身につけた技術を学校外でも発揮できるようにするために、子どもを支援する人たちにコミュニケーション手段やプロフィールなどを知ってもらう必要がある。そこで、簡単にインターネットに接続できる携帯電話を使って情報提供を行うことを提案する。学校外での物的、人的コミュニケーション環境を整えることで、子どもたちは安心して要求を伝えられるのではないかと考える。以上の実践をとおして、子どもがいろいろな場面において自分で表現できるようになることを願っている。子どもの要求、欲求をより質の高い要求（WANTS）へと高め、将来自分が参加する社会でより豊かな生活を送ることができるように育てていきたいと考えている。

（2）中学部 テーマ「WANTS に応える集団学習」

中央教育審議会でも話題に上っているが、全国の養護学校で行われている総合的な学習の時間の実践を通じて、いろいろな問題点が出てきた。例えば、総合的な学習の時間の趣旨が十分生かされていないことや、学習の実態が以前の

クラブ活動に近いということなどである。そして、総合的な学習の時間を見直していく必要性が指摘されている。

そこで、中学部ではこれまでの全国の実践を踏まえつつ、新たな観点での研究を進め始めている。今までの総合的な学習の時間では、学習の「テーマ」が十分に生徒の間で話し合われないまま、つまり教師の意図の下で実践が行われてきた傾向がある。そこで、中学部では、教師・保護者・本人がそれぞれ「なにをしたいのか（なにをしてほしいのか）」ということをアンケート調査し、それらを総合的に反映したグループのもと、実践をスタートしている。そして、本人の希望を最大限反映しながら学習を展開している。

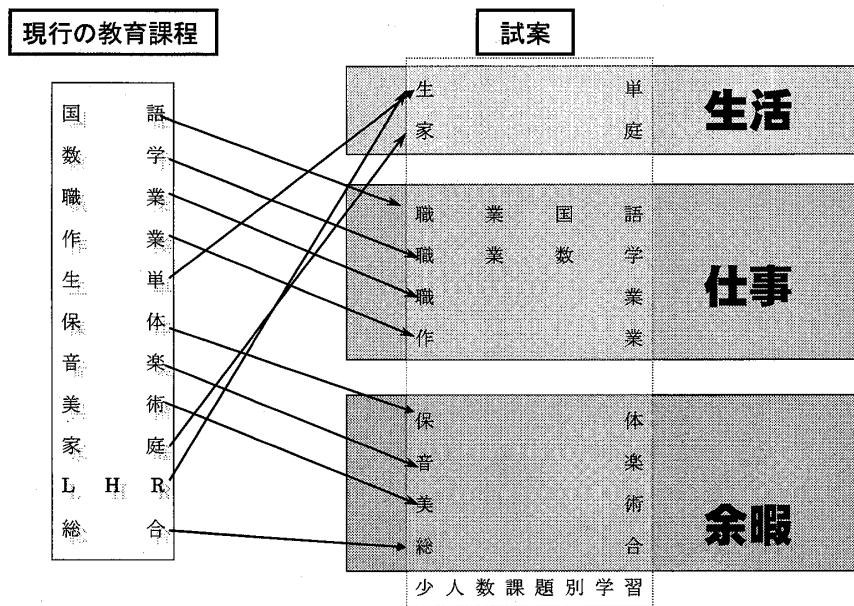
さらに、生徒の学習参加のスタイルを学習集団に反映させている。友だちと話し合う中で考えをまとめていくグループ、行動を伴いながら学習を深めていくグループ、自分の気持ちを他人に伝えたり選択したりする力を育てていくグループというふうに分けることで、それぞれのグループで狙いたい力を意識した学習が展開できるようにしている。

また、総合的な学習の時間では、評価が十分行われていないという指摘が従来からされている。評価が適切に行われないということは、自己満足的な実践になる危険性がある。そこで、ビデオ記録、作品の記録、発言の記録などを必ずとるようにしながら、できるだけ客観的な評価をしていくようにしている。

また、共動支援計画の目標を達成するために各教科の内容を考えいく。中学部という発達段階から、より生活に根ざした各教科のあり方を探っていきたい。

（3）高等部 テーマ「個別の共動支援に生かす教育課程の再編」

平成16年2月の研究大会の折り、高等部では個々の生徒への支援システムとして在学中は『個別の共動支援計画』を、卒業後は『個別の共動移行支援計画』を立て指導を行うことを提案し、実践報告した。その中で保護者・学校・関係機関が「共動」の姿勢で生徒にかかわって



いくネットワーク作りにも着手することができた。16年度は、その継続研究として教育課程（内容）の再編に取り組むことにした。これは従来の各教科としての目標や学習内容を、支援計画の目標を立てる観点である「仕事・生活・余暇」から考え直そうとするものである。そうすることによって、より目標を達成しやすい学習環境を整えることができると考えている。具体的には、図のように試案を作成して現行の各教科をどの観点に重点を置くかで振り分け、具体的・現実的な指導内容の精選を行っていきたいと考えている。また、新しく少人数課題選択学習を設定した。まだ計画の段階であるが、個の必要度に応じて内容を選定し習熟を目指した学習を展開したいと考えている。高等部では、NEEDSを踏まえたWANTSを本人が形成していくためにどのような指導・支援が必要なのか

を探っていこうとしている。よりよい進路決定に結びつく学習活動を展開していきたいと考えている。

5 教育学部との連携

研究全体を通して、地域支援の問題、WANTSの捉え方について、横浜国立大学の渡部先生から指導をいただく。また、香川大学教育学部より、コミュニケーション、および小学部の指導を坂井先生、医学的な立場から、および中学部の指導を繪内先生、研究の進め方および高等部の指導を小方先生にお願いしている。教育学部の先生方には研究内容への指導助言にとどまらず、適宜、研究全般についての評価をいただきながら3年間の研究を進めていきたいと考えている。